

杲宝撰『大日經疏鈔』における禪宗理解

千葉 正

一 はじめに

十四世紀、真言宗の学僧で、東寺学派の大成者、杲宝（二三〇六―一三六二）の教学大系の根幹をなす禪宗批判は「九顯十密」の立場をとる真言密教教学の中では、特異な主張である。また、杲宝の禪宗批判は、かなり激しい批判なのである。この激しい禪宗批判は、杲宝が四十四歳（貞和五年（二三四九年））の時に著わした『開心抄』上巻において見られる。⁽¹⁾そして『開心抄』上巻における、杲宝の激しい禪宗批判の特色は、ある特定の禪者たちに対しての批判なのである。⁽²⁾それは「禪密一致説」を主張する日本臨濟宗の禪者たち、具体的に名を挙げると虎関師練（一二七八―一三四六）と夢窓疎石（一二七五―一三五二）に対して向けられた批判である。しかし、これ迄のところ、筆者は杲宝の禪宗批判、或は禪宗への対応が、いつ頃から始まるのかということの検証は行ってこなかったのである。

そこで、杲宝の禪宗への対応の始原について考える上で、今回、取りあげる『大日經疏鈔』という著述に注目したのである。

では、何故、この『大日經疏鈔』を取りあげることにしたのか。

まず、理由の第一点目は撰述年代である。この『大日經疏鈔』は、杲宝が二十三歳から二十六歳にかけて撰述した書である。また巻数も全二十九巻からなり、その巻数が示すように、杲宝にとつての最初の大部の著述ということになる。従つて、撰述年代の早さと、その巻数の多さに注目したからなのである。

次に、理由の第二点目は、この『大日經疏鈔』という著述が持つ性格にある。

そこで『大日經疏鈔』が持つ性格とは、以下、二つに絞つて述べてみる。この『大日經疏鈔』は、その題名が示すように『大日經疏』という著述に対する註釈書である。そして『大

杲宝撰『大日經疏鈔』における禪宗理解（千葉）

二四

日經疏』は、中国、唐代のインド出身の密教僧、善無畏（六三七—七三五）が将来し、漢訳した『大日經』を、その善無畏の弟子である一行（六八三—七二七）が筆受して註釈を施した書である。⁽³⁾そして、この一行という人物が、所謂、中国禪宗の北宗禪の系譜に列なる禪者なのでもある。一行は『景德伝灯録』巻四では嵩山普寂禅師法嗣四十六人中に嵩陽寺一行禅師として記されている。⁽⁴⁾従って『大日經疏』の筆受者、一行は、禅僧と密教僧との性格を併わせもった人物ということになる。つまり『大日經疏』全二十巻自体が、後世、注釈書が多く、特に日本において著わされるが、その日本の注釈書が禪宗を意識した註釈を施すことになることから考えれば（なお、禪宗を意識した註釈が行われるのが十三世紀以降なのである）、一行が禅者の立場からの註釈を施していたのではないかという仮説が『大日經疏』本文の言外から成り立つものと考えられる。⁽⁵⁾

では、前述の『大日經疏鈔』自体がもっている二つの特色をまとめてみたい。

まず『大日經疏』の筆受者、一行その人が、禅僧と密教僧（他に天台、律も修めている）という二つの顔を持つ複雑な教学的背景を有した人物であることが特色の一つ目となる。続いて、杲宝が註釈を施した『大日經疏』自体が特異な教学的背景をもった典籍であることが特色の二つ目となる。それは、

やはり一行という人物が介在しているからなのである。従って、杲宝の『大日經疏鈔』自体においても、杲宝は禪宗のことを意識した註釈を施しているものと考えられる。

そこで、以上のような『大日經疏鈔』を撰んだ理由に基づいて、本稿は『大日經疏鈔』における禪宗に関わる記述を検討しつつ、杲宝の禪宗観（禪宗批判）の始原を考察する。そして『大日經疏鈔』において、若き杲宝の禪宗理解がどのようであったのかも併わせて検証していくことにする。

二 『大日經疏鈔』について

まず『大日經疏鈔』について、その内容、構成を、以下、まとめてみたい。なお、杲宝には、もう一つの『大日經疏』に対する註釈書が残されている。それは、杲宝が五十一歳のときより書き始めた『大日經疏演奥鈔』全五十六巻からなる大部の『大日經疏』の註釈書がある。しかし、この『演奥鈔』（以降『演奥鈔』と略す）は、杲宝が存命中には完成させることができず、弟子の賢宝（一三三三—一三九八）が継続した。もと『演奥鈔』は、杲宝の師、頼宝（一二七九—一三三〇？）の『大疏勘注』に基づいて「具縁品」（これは『大日經』の章の名（『演奥鈔』第三十六巻））までを、杲宝が自註を施した書である。なお『大日經疏』全二十巻は、古来（日本）より、最初の二巻と巻三の前半は『大日經』「住心品」の釈で「口

の疏」と呼び、教相部門を取り扱っているため註釈も多い。今回、取りあげる『大日経疏鈔』は「口の疏」の註釈書である。続けて『大日経疏』卷三後半以後は『大日経』「具縁品」以下の諸品の釈で「奥の疏」と呼び、事相に関する問題が多いため、講伝が主となり註釈書は少ない。また秘伝とするため、故意に文章の前後を入れ替えた爛脱も多く、師から直接教示される必要があるとされる。しかし、前述の『演奥鈔』は、この「奥の疏」の註釈書であるが、最終的には弟子の賢宝の存命中にも完成させることができず、『大日経』「持明禁戒品」までで『大日経疏』卷十七以降の註釈はなされなかったのである。

では、あらためて『大日経疏鈔』の内容、構成をまとめてみたい。この『大日経疏鈔』は『大疏杲宝鈔』とも呼ばれている。従って、以後は『大疏杲宝鈔』と略称する。

まず全二十九卷からなる。そして『大日経疏』「住心品疏」の註釈書である。全体から見ると師の頼宝の口説を訂正しつつ註釈を施した内容となっている。撰述年代は、奥書から見ると嘉暦三年（一二三二年）から元徳二年（一二三〇年）にかけて著わされたことが分る。従って、奥書から見れば、杲宝が二十三歳から二十五歳頃に著された書ということになる。

杲宝撰『大日経疏鈔』における禪宗理解（千葉）

三 『大疏杲宝鈔』における禪宗に対する記述の検証

なお、本稿で取りあげる『大疏杲宝鈔』は『続真言宗全書』第六卷に収められているテキストを用いる。

そこで『大疏杲宝鈔』は全二十九卷と大部な文献であるので、本稿では紙幅の制限上、特に杲宝が禪宗を論じている箇所より三点に絞って検証してみる。

まず第一点目は、前述の『大日経疏』の筆受者で註釈者でもある一行に関する箇所である。それは、次のように註釈する。

一行者。演密抄第一一云。一行者。疏主ノ諱。夫レ聖人作ハレ名ヲ。必ス不二徒然ナラ。唯一一ヲ為スルカレ行故ニ曰二一行ト。……又云ク。禪師一行トハ者。即是レ禪宗ノ之師匠ナリ也。……北宗ノ弟子ヲ名テ曰二普寂ト。即疏主之師ナリ也。文……私云ク。金剛頂義決ノ中ニ。一行阿闍梨対シテ不空三藏ニ受灌頂ヲ見タリ。若シ爾ラハ者或ハ入ニ二禪門ニ或ハ学スニ天台ヲ。雖レ然ト専ラ為ニ密宗ノ祖師一。

ここでは、冒頭で「一行者」と『大日経疏』の本文が記され、その後、遼の覚苑撰『大日経義釈演密鈔』卷一の文章が引用されている。この『演密鈔』（以後『演密鈔』と略す）は、遼の覚苑が道宗帝の勅によって太康三年（一〇七七年）に著した全十卷からなる『大日経義釈』に対する註釈書である。『大

日経義釈』全十四巻は『大日経疏』の一行の註釈の不備を補うためにあらためて校訂して著わされた註釈書であり、日本の台密で重視された典籍でもある。この『演密鈔』には、撰者覚苑が学んだ澄観・宗密といった華嚴教学の影響が強く反映された註釈書である。

では、杲宝は一行という人物を明確に禅門の人物でも天台の人物でも無い、あくまでも「密宗祖師」と記している。従って、この註釈は、すでに杲宝が「禅密一致説」を認めていることが明らかとなっていると言えよう。なお、日本中世史研究の分野では、十世紀から十三世紀にかけての東アジア（渤海・高麗・遼）文化交流史研究が、最近、盛んになされていて、特に日本中世仏教に与えた影響が大ききものであったとする研究成果が上がってきている。⁽⁷⁾そして、この『演密鈔』にも、日本へ十二世紀初頭に伝えられて、東密・台密の両密教において盛んに引用されている。

次に、杲宝の禅宗批判の特色の一つとして、前述の『開心抄』上巻の中で、禅宗の「祖統説」批判がある。⁽⁸⁾この批判において、杲宝は禅宗を達磨私建の法門と評し、その時の直接の批判の対象者は、日本臨済宗の虎関師練の説に対する批判であった。この「祖統説」批判の背景には、密教も禅宗も共に「血脈」と法の伝えられ方（相承）を重視する法門ということが考えられる。そして、その伝えられる法は「心地」と

いう言葉で表現されている。従って『大疏杲宝鈔』において、この「心地」という言葉が重要となっている。それは、次のような註釈箇所を示される。

釈迦菩薩。蒙シ定光ノ之時。成仏。何ガ故。具修シ方便。要ハ待テ無師自覚。方ニ名シレト耶。……問今宗意。伝法阿闍梨。対シテ弟子ニ授ルニ心地一時。自ラ方ニ為ニ成仏。将如ク三釈迦菩薩ノ蒙ルカ授決。後時ニ待テ無師自覚。為ニ成仏。答。此疑尤至要也。学者輒ク難レ決之。私ニ案スル之。顯密ノ二教授ニ心地一儀式。在レ迷在レ悟所住各別ノ故。顯教ハ以ニ授記。為ニ遠因ト。密教以ニ伝授。為ニ直因ト也。所謂成ニ釈迦成道ノ儀式。初メ対シ定光仏ニ受ニ記別。後ニ対ニ油麻ノ諸仏ニ授ニ心地。是ニ即顯密二教授記ノ通相也。以レ之ヲ案スル之。種因海ノ行人ハ於テ一切ノ処ニ蒙ル授記。皆雖モ受クモ師授。只憶ニ念シテ。此ヲ全ク非スニ開悟之時。方便修行シテ。待ニ自覚。而成仏ス。……楞伽ノ隱密ノ授記等。悉ク説クハ。当来作仏。即是也。

ここでは、直接には禅宗の名は挙げてはいないが、禅宗の典籍で例えば馬祖の語録や黄檗の『伝心法要』⁽¹⁰⁾では「心地法門」という言葉が記され、また延寿の『宗鏡録』⁽¹¹⁾巻九七では多くの「心地」という言葉が記されている。つまり、禅宗には「心地」を重視する考え方を有する法門であったと言える。⁽¹²⁾また、禅宗が重視する『楞伽經』の「隱密授記」と言葉も、禅宗の存在を想定できるものと言えよう。つまり、この箇所では、杲宝は師から弟子への相承される法としての「心地」をもつて顕教と密教に分けようとしている。さらに「授記」と「伝

授」とに成仏の時間を問題とする。そして、顕教は「当来成仏」として未来に成仏するのであると説いている。

そこで、密教の成仏するまでの時間については、続けて、次のように説く。

密教授記^ト者。灌頂授法之儀式也。……次ニ一切凡夫入ニ仏地^一者。真言行人^ニ於^テ凡夫地^ニ灌頂授法^{スル}祕密ノ表示ノ軌則也。初メ入^テニ三昧耶^ニ一具^ニ足^シ四重^ヲ。即入^ニ諸仏ノ位^ニ已^ニ同^ズ大覚位^ニ。……能以^ニ凡夫身^ヲ一現^ニ成^ニ就^ニ仏身^ヲ。是皆師弟俱^ニ住^{シテ}ニ仏地^ニ作^スニ曼荼羅^ヲ一故^ニ。灌頂授法之儀式。親^{マノ}アタリ^リ是成等正覚ノ相也。然則顕密授記。遠因近因天地是別。故^ニ不^レ可^ニ相乱^ス。

ここでは密教が師と弟子が面授し、そして、灌頂した瞬間に即身成仏するという、全く時間の経過が無い成仏を説く法門であると、杲宝は述べている。従って、杲宝は「授記」ということを中心に顕教と密教との区別を付けようとしているものと言える。

四 むすびにかえて

まず、杲宝の禅宗に対する批判的な言説は、既に二十代前半の頃より始まっていた。そして、その禅宗批判の内容も、後の『開心抄』上巻における、日本臨済宗の「密禅一致説」の主張に対する批判及び、禅宗の法の相承に対する批判とも、関わるものであった。

杲宝撰『大日経疏鈔』における禅宗理解(千葉)

- 1 拙稿「杲宝の禅宗観―『開心抄』上巻をめぐる―」『印仏研』四十二―二、一一八―一二〇頁
- 2 拙稿「杲宝の禅宗批判再考」駒波大学院『仏教学研究会年報』第三十号、十一―二十二頁
- 3 長部和雄『一行禅師の研究』北辰堂
- 4 大正蔵五十一、二二六頁^b
- 5 中国初期禅宗と密教の関係については田中良昭『敦煌禅宗文献の研究』大東出版一九八三、松本史朗『禅思想の批判的研究』大蔵出版一九九四
- 6 続真言宗全書六、二六下、二七上
- 7 参考として上川通夫「一切経と中世の仏教」年報中世史研究第二四号所収、横内裕人「自己認識としての顕密体制と『東アジア』」日本史研究五二二号所収
- 8 大正蔵七七、七三七^bに虎関の説(『宗門十勝論』)の説を「此是胸臆之浮言也。不足為論」と非難する。
- 9 続真言宗全書六、二五六上―二五七上
- 10 大正蔵四八、三八一^b
- 11 同上、九三七^c
- 12 松本前掲書に「心地」は密教に由来する言葉で禅宗がそれを採用したのではないかと論ずる。
- 13 続真言宗全書六、二五七下

〈キーワード〉 一行、杲宝、心地、禅宗、大日経疏、大日経疏鈔、
顕教

(駒澤大学大学院修了)